

「地球環境と立山の自然」の開催にあたり

晴れた日に富山市の市街地から見える立山連峰は平野の東側に立てられた大きな屏風のように見えます。立山では、標高が高くなるにつれて気温や気圧が低くなることからもわかるように、標高とともに気象の状況が変化します。立山の降水量は平野と比べて多く、さらに、標高が高くなるほど多くなる傾向があります。立山に降った雨や雪は常願寺川などの河川に大量の水を供給します。

立山の高山帯は平野の地上付近を覆う大気とは異なる層の大気に包まれることが多く、アジア大陸起源の汚染物質を含んだ大気が通過することもあります。

立山の自然の紹介に関して、環境や気象に関する紹介はあまりありませんでした。その大きな理由として、強風、多湿、低温などのきびしい気象状況のために観測機器を正常に維持管理することが難しく、電源を必要とする機材を設置できる場所も限られていること、そして、冬季は調査がほとんどできないため、データが断片的になってしまふこと、さらに、4～5年程度観測を継続しても、大きな傾向をつかむまでには至らないことです。

この展示では、当館や立山カルデラ砂防博物館の学芸員、富山県立大学、富山大学、九州大学の研究者などが、主に立山黒部アルペンルートが利用できる春から晚秋にかけて立山で行っている酸性雨や霧、大気汚染物質、積雪、気象などの調査・研究やこれらが生物に与える影響に関する研究の成果を、水や大気の循環と共に伴う物質循環の視点から整理しました。



主催 富山市科学博物館
共催 立山カルデラ砂防博物館